鳥籠（十三）

岡本綺堂

こゝで人に出逢つたのは、隼雄に取つては神の手に縋つた程に嬉しかるべき筈であつたが、其人の人相ゝ云ひ、風俗ゝ云ひ、彼の眼には懐しく映らなかつた。寧ろ先刻の狂人と同じ程度の恐怖を彼に與へた。

男は長い髪と赧黒い顔と鋭い眼と汚い髭とを有つてゐた。年は幾歳ぐらゐか判らなかつた。彼は垢染て破れた商袖の短いのを着て、頭には褪色の古い鳥打帽子を被つてゐた。泥塗れになつた黒い脚絆を着けて、素足に草鞋を穿いて、手には樹の枝を折つたらしい古い杖を持つてゐた。

人を殺はない少年の眼にも、これが懐かしい人らしく見えなかつたのは無理もなかつた。隼雄も默つて立つてゐた。

「おい。お前は何處から來たんだ。」男は濁つた太い聲でぶつきらぼうに訊いた。隼雄は何事も正直に答へた。

「む。狂人に魅されたのか。」と、彼は嘲るやうに笑つた。「可。俺が連れて行つて遣らう。」

男は杖で芒藪を拂ひながら先に立つた。隼雄は其後に從いて行つた。大なる犬も遲々歩いて來た。

半町ばかりも行つたと思ふと、芒は段々に疎になつた。二人の草鞋が踏んでゐる草の間には、冷い黒い土が所々に露れて來た。水の音が漸次に近くなつた。濕つた苔の粘り着いた石や岩が多くなつた。彼等は山川の畔に出た。

「それ、頂上は彼處だ。」

男の指す方を敬仰けて、隼雄は又驚いた。先刻まで自分達の遊んでゐた高雄山は、およそ一里餘りも隔たつた所に遠く聳ゆてゐた。自分は先刻から半は夢中で行先を急いでゐたので、何のくらゐの路程を歩いたか些とも記憶してゐなかつたが、まゝで反對の方角に向つて無茶苦茶に進んで來たらしく思はれた。自分は山へ登る意で、却つて何時の間にか山を降つてゐたのであつた。時間も餘ほど過ぎたらしい、高い梢を洩れて來る秋の日影も大分薄くなつてゐた。川の中から流れて來る冷い空氣は隼雄の汗だらけの身體を寒くした。彼は疲れ切つて既ち歩かれなかつた。彼は倒れるやうに傍の石に腰を卸した。

男は其の彫らんだ懐を覗いて視た。

「お前、何か懐に食物を持つてるスのか。」

携帯の握り飯は山の上で食つて了つたが彼はまだ他に麵麭の袋を懐にしてゐた。先刻から其處も中を無茶苦茶に歩いてゐる中にも、幸ひに遺失もしないで此處まで持つて來たのであつた。彼自身もそんなことは悉皆忘れてゐたのを男に訊かれて初めて思ひ出した。これと同時に彼は俄に空腹を感じたので、懐から麵だらけの袋を探り出して菓子麵麭を一個食つた。

男も手ふやうに大な手を出して默つて其の麵麭を取つて頬張つた。更に其業の一個を犬にも投げて遣つた。彼は又る取つて食つた。終には隼雄の手から袋よを取上げて、三個も四個も續けて呑込時むやうに食つて了つた。隼雄も呆れて眺めてゐた。

彼は川の水を掬くつて飲んだ。隼雄も飲んだ。冷い流れは氷のやうに冷たかつたので、隼雄も少し蘇生つたやうになつた。

「彼は一體何者であらう」と、隼雄は朝に考へた。世間を多く知らない少年の頭には彼の正體が判然と映らなかつた。隼雄は彼を百姓かとも思つた、樵夫かとも思つた。何とし此の場合、彼に縋んで元の高雄山まで連れて行つて貰ふより他はあらまいと考へたので彼は自分の麵麭を悉く奪はれたことを左のみ口惜いとも思はなかつた。

「さあ、行かう。」

「高雄の方へですか。」

「む。」

彼は少年と犬とを伴つて、川上の方へ上つて行つた。此地へ行く方が捷便であらうと察した隼雄は默つて男の後に續いた。路は段々に險しくなつて、水の色と石の色とは悉く白くなつた。

「この路を行つても可いんですか。」と、彼も稍不安になつて來た。

「む。」

男は矢はり先に立つて行つた。同じ山續きとは云ひながら、高雄の峰とは段々に遠ざかつて行くやうに隼雄は感じた。この男と一所に行くことは何だか不安心でならなかつた。

九車楽車寺刻表 一冊二〇〇 横濱賀行一冊二〇〇 不動金行一冊六〇 不動尊廻廊

第一高一千五百十三號 第三種郵便物認可

鳥籠（十四）

岡本綺堂

隼雄は途中から逃げ出した。いかに地理を暗じない彼の頭から割出しても、斯ういふ路を取つて行くのは確に方角が違つてゐるらしく思はれたのと、もう一つは、此の男の暴くれた人相と無作法な擧動とが、彼に安心を與へないからであつた。彼は隙を窺つて一散に舊の路へ駈け戻らうとした。彼は草臥足を引摺つて駈けた。

男はそれと見て、直に手をあげて犬を走らせた。熊のやうな犬は素直に人の命令を聽いて、旋風のやうに眞驀に追つて來た。彼は險しい岩石を跳り越ねて、早くも少年の行く手に立塞がつた。彼は眼を瞋らせて低く唸りながら大きい牙を剝き出して少年を脅かした。隼雄は足が縮んで了つた。

「おい、逃げたつて仕樣がねえ。温順しく來い。」と、男も犬と同じやうな歯を剝き出して笑つた。

人と犬との挾み撃ちを受けて、隼雄は何うすることも能なかつた、もう此上は彼に憫みを乞うて免して貰ふより他に手段はないと考へた。

「どうぞ堪忍して下さい。僕一人で歸りますから。」

「一人で歸れるものか。こゝらで彷徨してゐると豺に喰はれるぞ。」

「でも、其方へ行つちやア段々遠い所へ行くんでせう。僕は高雄山へ歸りたいんです。先生や友達が必然搜してゐるでせうから。」

隼雄は泣聲になつて賴んだ。男は默つて立つてゐたが、やがて思ひ出したやうに向き直つて訊いた。

「お前、錢を持つてゐるか。」

隼雄は彼の底意を悟つた。金を遣つたら素直に免して呉れるだろうと思つたので、彼は正直に答へた。

「[illegible]五十錢ほど持つて[illegible]。」

「此方へ出せ。」

男は隼雄の蟇口を奪ひ取つた。

「それから衣服も袴も帽子も皆な脫いで了へ。裸になつたら歸して遣る。忌なら一所に來い。」

寒ぞ寒ぐるみ脫いで裸體にされても、こんな氣味の惡い男の路連を斷つた方が優だと隼雄は即座に決心した。彼は温順く帽子を脫いで石の上に置いた。それから袴の紐を解かうとした。

この時に犬は何を見たか衝と身を飜して川上の方へ走つた。尾を掉つて二聲三聲高く吠ねた。これに呼び出されたやうに大い樹の間から一つの人影が現はれた。男か女か能く判らなかつたが、漸次に近くに從つて其れは結髮の女であることが知れた。女は男と同じ筒袖のやうなものを着て、魚の腸のやうな細帶を締めて、汚れた脚絆に草履を穿いてゐた。

「その小僧を何うしたんだい。」と、彼女は男のやうな濁つた聲で訊いた。

「迷兒になつてゐたから連れて來たのよ。錢と衣服を取つたら追つ放して遣らうかと思つてゐるんだが……。」

「お止よ。お前。」と、女は隼雄をじろじろ視た。「この位になつてゐりやア世話も燒けないから。連れてお出でよ。これでも役に立たあね。過日死んだ餓鬼と同い年ぐらゐだらう。」

「さうよなあ。」

「連れてお出でよ。」

折角免されさうになつた隼雄は、更におそろしい鬼女に逢つた。彼は堪忍して下さい、歸して下さいと泣いて賴んだ。

「不可ねえつて云へば……。強情な小僧だ。お前、少し引つ毆いてお遣りよ。」

女の方が男よりも猛惡であるらしいので隼雄は再び顫へ上つた。併し彼は所詮逃げることは能ないと諦めて、兩手で顔を掩つて泣いた。

「さあ、お出で。日が暮れるよ。」と、女は隼雄の腕を摑んで引立てた。彼は動くまいと身を固くしながら二足三足引摺られて行つた。女は焦れて其の横面を平手で一つ毆つた。

「這奴は錢を持つてゐないのかい。」

「五十錢ばかりあるさうだよ。」と男は蟇口を振つて見せた、

「そりア妾が預つて置くよ。」

女は蟇口を引奪つて了つた。

「さあ、ぐずぐずしないでお出で。」

隼雄は無二無三に引摺られて行つた。日影の薄い山間は漸次に暮れて、水の上には薄暗い霧が這ひ擴つた。

十月の雜誌要目

▲科學と文藝●●●●　自然科學者としてのゲエテ（[illegible]）自分の具體的問題（能成）種族の精神と個體の生活（一夫）宗教道德の第一要素（湿）光と入生（藤浪）畫家と金（劉生）詩（よさの、伊作、阿佐緒）英文感想（岡田）

▲中央美術●●●●　日本畫の教育方針（諸家）安田靫彦論（抱汀）佛國美術界の現狀（高村）釋迦八相（新海）大雅と南畫（未醒）奈良の寫生地（弘光）明治神宮（伊東）「現代の日本畫」を讀む（柏亭）色彩と調和（鐵二郎）

▲浮世繪●●●●　鈴木春信の畫（五葉）歌麿と燕十は別人（林）木曾六十九次に就て（佐藤）天璋院樣の一枚繪（露魚）初代豐國の價値（[illegible]）